

新しい音声教育実践における 学習者の学び

—オンデマンド併用授業による発音学習—

戸田 貴子¹・大久保 雅子²

要 旨

本稿では、近年の早稲田大学における発音学習教材の開発と音声教育の取り組みを紹介する。また、教室内外で学習者がいつでも発音練習できるよう学習機会を提供し、自律学習を促すという新しい音声教育の考え方について述べる。

早稲田大学では、2000年度から留学生対象の発音関連科目が数多く開設されてきた。その中でも、新たな取り組みであるオンデマンド併用授業「なめらか！発音3-4」が2012年秋に開講した。この授業の学習者の期末レポートを調査・分析した結果、オンデマンドを利用した発音学習は可能であり、さらには学習者の自律学習を促すことが示唆された。

キーワード

音声教育 発音学習 オンデマンド授業 自律学習 シャドーイング

1. はじめに

近年、日本語教育における音声研究は目覚ましい進歩を続けており、数多くの研究成果が報告されている。また、それらの研究成果を踏まえた音声教材も出版され、様々な音声教育実践の取り組みが行われるようになってきた。

早稲田大学では、2000年度から留学生対象発音関連科目が数多く開設されてきたが、その中でも、2012年秋学期に新設した「なめらか！発音3-4」はオンデマンド併用授業という新しい授業形態による特色ある科目である。オンデマンド併用授業とは、対面式とオンデマンド授業を組み合わせる授業で、2012年のデータによると、本学の通学制オンデマンド授業の科目数はフルオンデマンドが131科目、オンデマンド併用が308科目である。日本語教育研究センター設置の科目は短期プログラムを含めて合計343科目であるが、フルオンデマンドが0科目、オンデマンド併用が1科目であり、「なめらか！発音3-4」が唯一のオンデマンド併用授業となっている（2013年春学期）。一学期15週のうち、最初の5回は対面式授業として教室で行われ³、その後6週目から15週目までの10回はオンデマンド授業が行われる。10回分の授業は学習者が教室に集まることなく、自宅からでも大学のPC室からでも授業に参加できるよう、工夫されているのである（本学にお

けるオンデマンド授業の詳細については本誌所収の稲葉論文を参照されたい)。

本稿では、従来の対面式授業とは全く異なるオンデマンド併用授業の特長について述べ、学習者がどのような学びを得たのかを明らかにする。

2. 「なめらか！ 発音 3-4」の概要

2.1 「なめらか！ 発音 3-4」の特徴

本コースの到達目標は、「なめらかな発音で話せるようになるために、発音のしくみや規則を学び、学習方法を身につけていくこと」である(2013年度シラバス掲載)。

語学の授業の場合、一方的な講義形式で学習者が講師の話聞くだけでは、言語能力の向上は期待できない。学習者が主体的に授業に関わり、練習を重ねていくことが必要である。その上、モデル音声を聞いて単にリピートするだけでは、ただ真似をしているに過ぎず、音韻理解にも繋がらないため、不十分である。そこで、「なめらか！ 発音 3-4」では、本特集で紹介されているように「オンデマンド講義」だけでなく、「発音チェック」「BBS」「シャドーイング練習用素材」など、様々な工夫を施し、上述の到達目標を達成するために、学習者の発音学習を支援している。ただ、このような工夫は、最大限に活用されてこそ初めて成果が得られるものである。このため、第1週目から5週目の授業への参加を必須とし、授業では後述の主教材の第1課から第8課までの内容をカバーしつつ、第6週目からは各自が第9課から第20課までの学習を進めることができるように丁寧に説明を行っている。

最初の5回の対面式授業を行う教室は各学生に一台PCが設置されているコンピュータールームを使用し、実際にPCを操作してCourseN@vi⁴にログインした状態で行っている。第1週目から5週目の授業で、学習者はこれらの仕組みに慣れ親しみ、6週目から自律的に学習を進めているのである。

授業内容は次のとおりである(表1)。

表1 「なめらか！ 発音 3-4」授業内容

第1週	オリエンテーション	第9週	強調
第2週	あいさつの発音、拍	第10週	母音の無声化
第3週	日本語のリズム	第11週	複合語のアクセント
第4週	名詞のアクセント、人名のアクセント	第12週	動詞のアクセント
第5週	文末イントネーション	第13週	表現意図とイントネーション
第6週	連濁、数詞	第14週	への字型イントネーション
第7週	オノマトペ、縮約語	第15週	まとめと振り返り
第8週	外来語、縮約形		

本コースには、もう一つ大きな特徴がある。それは、シャドーイングを導入することによって、学習者が発音の学習方法を身につけ、教室内外で常に発音を意識しながら話す習慣をつけることができるということである。そのため、本コースの主教材には、『シャドーイングで日本語発音レッスン』(戸田編著2012)を採用している(この主教材の詳細につ

いては後述する)。したがって、本オンデマンド授業では主教材とオンデマンド講義を連動させて学習する仕組みになっている。

2.2 オンデマンド授業による新しい発音学習方法の利点

「なめらか！発音3-4」は全く新しい音声教育の形を提案するものである。従来の音声教育は、対面式授業で教師が学習者の発音を聞き、修正するという形が一般的であった。知識と経験のある教師が、学習者の様子を見ながら、理解度や習熟度に合わせた丁寧な指導を行うことができれば、対面式授業に勝るものはないであろう。しかしながら、この方法には次のような問題点がある。

- 1) 音声教育については今まで広く議論がなされてこなかったため、教師側から「どのようにして発音指導をしたらいいかわからない」という声が度々聞かれる。指導する教師の音声知識が問われ、学習者に発音の学習機会を均一に提供することが難しい。
- 2) 教師側から「限られた授業時間の中で、発音練習にかけられる時間がない」という声が度々聞かれる。授業時間という物理的制約は常に存在し、無制限に延長することは不可能である。通常、文型・語彙・表記等に時間がかかるため、発音のための時間を確保することができないのが現状である。
- 3) 教室で発音の間違いを指摘される学習者にとっては、苦痛を伴うことがある。通常日本における日本語教育の現場においては、学習者の母語背景は多様である。つまり、母語干渉による発音上の問題点は、他の母語を持つ学習者にとっては全く問題にならないこともあり、特定の母語による発音の癖を指摘され、他のクラスメートの前で修正させられることになる。
- 4) 学習者の母語が異なるため、上記のように特定の母語の影響を受けた問題がない学習者にとっては、教室授業における学習時間の無駄である。教師1に対して複数の学習者がいる場合、教師がひとりの学習者に発音指導を行っているとき、ほかの学習者はそれが終わるのを待っていることになる。

1) について、本オンデマンド講義(2.3.1参照)では、日本語の音声的特徴を専門用語ではなく、平易な日本語でわかりやすく説明し、音声サンプルや動画によって学習者の理解が促される。なお、講師の説明は日本語もしくは英語字幕を表示して聞くことも可能である。オンデマンドコンテンツ自体は、日本語学習者のみならず、日本語母語話者、日本語教師志望の学生にとっても参考になる内容である。本学のオープン科目⁵である「日本語の音声Ⅰ」および「日本語の音声Ⅱ」、日本語教育研究科設置の理論科目⁶「音声・音韻」および「実践研究10」でも授業の内容理解を促進するための補助教材としての利用実績がある。

2) については、学習者の数が多くなればなるほど、ひとりあたりにかけることができる時間が少なくなるため、教室現場における対面式授業で教師が学習者の発音を聞き、修正するという授業形態には限界がある。学習は教室内外で起こるものであり、学習者が主体的に発音に意識を向ける習慣をつけることが大切であるという前提において、教室外でも学習者が無理なく発音学習を継続していくことができる方法を提案していく必要が

ある。

3) について、本オンデマンド授業では周りに人がいない環境で、自宅からでも研究室からでも発音学習が可能であり、「発音チェック」によるフィードバックは完全に個別に行われているため、このような問題が解消される（「発音チェック」については、大久保ほか（本誌所収）を参照されたい）。また、母語別の発音に特化された問題点も選択式の「母語別発音レッスン」で、練習することができるように工夫されている。

4) についても、オンデマンド授業では自分の問題点に焦点を当てて、自分の時間を最大限に活用して学習を進めていくことができるという利点がある。

以上のように、オンデマンド授業を活用することによって、従来の音声教育における問題点が解消されるのではないかと考えられる。

2.3 オンデマンド授業の学習の流れ

オンデマンド講義自体は約20分程度であるが、以下の学習の流れを追っていくと、合計で90分程度になるように配慮されており、週1回90分の授業にあたるように構成されている。

- 1) 主教材を使用した学習（本文・発音のポイント・練習問題）（2.3.4 参照）
インターネットによる「発音のポイント」ミニ講座の視聴
- 2) オンデマンド講義受講と発音練習ボタンによる発音練習（2.3.1 参照）
- 3) シャドーイング練習用素材を使った発音練習（2.3.3 参照）
- 4) 「BBS」への参加
- 5) 「発音チェック⁷⁾」の提出・再提出

オンデマンド授業の学習の流れは次のとおりである。

まず、主教材『シャドーイングで日本語発音レッスン』を使って練習を行う。「本文」、「発音のポイント」、「練習問題」ができたなら、インターネット上で各課の動画による説明を視聴する（<http://www.3anet.co.jp/ja/2861/>）。

次に、オンデマンド講義を受講する。このとき、オンデマンド講義を視聴しながら、必ず「発音練習ボタン」を押し、声に出して発音練習を行う。本コースでは15回分のオンデマンド講義受講が課題となっている。

その後、シャドーイング練習用素材『発音練習のためのシャドーイング』を使って発音練習する。日本語スクリプトと中国語・韓国語・英語の対訳もあり、素材の意味を確認することができるよう配慮されている。シャドーイング練習用素材は全部で45種類ある。本コースではこれら45種類の素材を使ったシャドーイング練習が課題となっている。

以上のほかに、「BBS」にコメントを投稿して、メンター⁸⁾や他の学習者と発音について意見交換を行うことができるよう工夫されている。「BBS」を活用することによって発音に関する理解が深まり、本コースの課題である期末レポートを書く手助けにもなる。なお、期末レポートの詳細は4章で述べることとする（「BBS」については、千ほか（本誌所収）を参照されたい）。

さらに、「発音チェック」の機能を活用し、自分で録音した発音を提出することができ

る仕掛けをつくった。この機能により、自分の発音をメンターにチェックしてもらい、フィードバックをもらう機会を提供することができるようになった。学習者が聞き手に伝わる発音ができているかどうかを知る手掛かりとなり、どのように改善したらよいかかわかるようになっている。また、フィードバックを踏まえたうえで、再録音した自分の発音を再提出することも可能である。

本オンデマンド授業に収録されているコンテンツは、最新の音声研究の成果を踏まえて開発された教材を結集したものとなっている。以下に、それらの教材の詳細を述べる。

2.3.1 オンデマンド講義

本授業におけるオンデマンド講義は、2008年に開発した「コミュニケーションのための日本語発音レッスン（コンテンツ）」（本誌所収の稲葉論文を参照）が基となっている。この「コミュニケーションのための日本語発音レッスン（コンテンツ）」は、『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』（戸田2004）を参考にして開発したもので、全10回の講義と中国語・韓国語・英語から選択できるようになっている母語別発音レッスンが収録されている（表2）。本講座のインターフェイスは、教師（動画、図1）、スライド（パワーポイント）、目次（ハイパーテキスト）、発音練習ボタン（音声ファイル）、字幕から構成されている。学習者が教師の講義を聞き、日本語の発音の特徴を学習しつつ、聞き取りと発音の両側面から練習を行うことができるように工夫されている。動画による教師の説明とパワーポイントによるスライドを組み合わせた講義から日本語音声の特徴を学び、自分のペースで発音練習ボタンを押して音声ファイルを再生し、何度でも発音練習できるようになっている。また、聴覚に頼るだけでなく、学習者が理解しやすいようイントネーション曲線やアクセント記号などの視覚的情報も提示するという工夫も施されている。

本講義は、音声的側面に焦点を当て、日本語音韻の学習を行うことにより、発音に対する意識化を促すことを目指している。この講義は現在、早稲田大学遠隔教育センターによって、本学の海外協定校にも配信されている（本誌所収のメーターピスイット論文を参照されたい）。

表2 「コミュニケーションのための日本語発音レッスン」の講義内容

第1回	発音練習のポイント	第8回	イントネーション
第2回	日本語の音	第9回	気持ちを伝える話し方
第3回	日本語のリズム	第10回	シャドーイング
第4回	話しことばの発音	中国語母語話者のための発音レッスン	
第5回	名詞のアクセント	韓国語母語話者のための発音レッスン	
第6回	「い形容詞」のアクセント	英語母語話者のための発音レッスン	
第7回	動詞のアクセント		

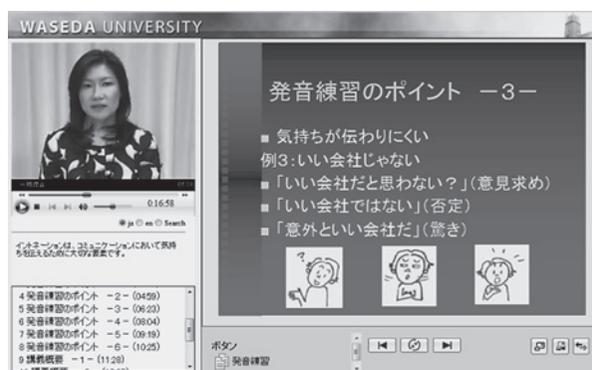


図1 「コミュニケーションのための日本語発音レッスン (コンテンツ)」動画画面

「なめらか！発音3-4」の授業におけるオンデマンド講義は、前述の「コミュニケーションのための日本語発音レッスン」の講義に、「連濁」「オノマトペ」「母音の無声化」「への字型イントネーション」の4回分の講義を新たに収録して加えたものである。なお、新たに追加されたこの4回分の講義は、後述する『シャドーイングで日本語発音レッスン』を参考にして制作されている。

2.3.2 シャドーイング練習用 DVD 教材「日本語でシャドーイング」.

本 DVD 教材は、シャドーイングの練習方法を紹介し、自律学習を促すことを目的とした教材である。本教材は3部構成になっており(表3、図2)、字幕あり(日本語・韓国語・中国語・英語)・字幕なしの選択機能も搭載されている。本教材は、シャドーイングに関心を持つ日本語学習者および日本語教育関係者に活用してもらうことを目的としてインターネットで一般公開している (<http://www.gsjal.jp/toda/shadowing.html>)。

表3 「日本語でシャドーイング」の構成

Part I 解説編	「シャドーイングとは」
Part II ナレーション編	「東京の魅力発見」 1 新宿駅周辺、2 麻布十番周辺、3 後樂園周辺
Part III 会話編	「ベストフレンド」 1 ダイニングバー、2 結婚披露宴



図2 Part I 解説編「日本語でシャドーイング」Part II ナレーション編と Part III 会話編

本教材は「音声習得ストラテジーと発音学習システムに関する実証的研究」平成18～20年度科学研究費補助金基盤研究（B）（代表者：戸田貴子）の研究成果の一部として制作されたものである。戸田（2008c）では、大人になってから学習を開始し、高度の発音習得を達成した学習成功者の特徴を明らかにするために、6名の学習成功者を対象にアンケート調査とフォローアップ・インタビューを行い、分析を行った。調査の結果、学習成功者は積極的にシャドーイングを実践していることが明らかになった。また、学習成功者はテレビ、ラジオ、ドラマ、アニメなどの豊富なリソースを活用し、それらを視聴しているときに、シャドーイングを実践し、習慣になるまで行っていた。さらに、音声化したシャドーイングだけでなく、小さな声でぶつぶつと呟く「マンプリング」や声を出さずに行う「サイレント・シャドーイング」という方法も教室内外で実践されていた。これらの研究成果を踏まえ、DVD教材「日本語でシャドーイング」を開発し、発音習得を促すための効果的なシャドーイング方法の実践を提案している。

本教材は上述のオンデマンド講義の第10回「シャドーイング」の一部にも使用許諾を得て収録されている。

2.3.3 シャドーイング素材集『発音練習のためのシャドーイング』

「なめらか！発音3-4」では、オンデマンド講義のほかに、シャドーイング素材集『発音練習のためのシャドーイング』の素材音声とスクリプト（英語・中国語・韓国語訳付き）を収録し、学習者にいつでもシャドーイング練習できる学習環境を提供している。この素材集は、2009、2010年度の早稲田大学日本語教育研究センターの重点研究プロジェクトの成果として開発されたものである。45種類のシャドーイング素材が収められており、日本の偉人や昔話やアニメキャラクター、ことわざ、世界遺産に登録されている建築物、学校や寮での会話など、学習者に興味を持たれそうなトピックを扱っている（表4）。素材によって長さは異なるが、1ファイルあたり約2～3分である。なお、これらの素材を完璧にシャドーイングできるようになることが本授業の目標ではなく、シャドーイングの練習方法に親しみ、インプットの量を増やし、情報処理速度を速めていくことを目指している。

表4 『発音練習のためのシャドーイング』の素材一覧

1	おはようございます	24	教科書、見せてもらえる？
2	早退	25	京都「清水寺」
3	通訳	26	棚から牡丹餅
4	羽田空港 その1	27	ちりも積もれば山となる
5	羽田空港 その2	28	虎退治
6	道案内	29	ドラえもん人気の理由
7	フレンチトーストを作りましょう	30	ドラえもん誕生秘話 その1
8	せんとくん	31	ドラえもん誕生秘話 その2
9	情けは人のためならず その1	32	日光東照宮

10	情けは人のためならず その2	33	ハチ公 その1
11	のっぺらぼう	34	ハチ公 その2
12	マクドナルドじいさん	35	弁慶の泣き所
13	ランチタイム	36	ピザの注文
14	寮の友達の部屋で	37	一休さん
15	ジョギング	38	新しいことば その1
16	友達同士	39	新しいことば その2
17	早口言葉	40	平城遷都 1300 年祭
18	アクセント	41	ヘレン・ケラーとサリヴァン先生
19	一期一会 その1	42	本田宗一郎ってどんな人？
20	一期一会 その2	43	本田宗一郎の生い立ち
21	神楽坂	44	本田宗一郎の終焉～そして次世代へ
22	イチロー	45	本田宗一郎の名言
23	宇治で出会う世界遺産「平等院」		

2.3.4 『シャドーイングで日本語発音レッスン』

本書は、「なめらか！ 発音3-4」の指定主教材である。シャドーイング練習によって、なめらかな発音を目指すためのもので、特長は以下の5つである。

- 1) 発音の上達に必要な音声知識を身につけることができる。
- 2) 自然でなめらかな発音を身につけることができる。
- 3) 日本文化、観光名所、ことわざ等、豊富な話題が盛り込まれており、発音練習をしながら、役立つ情報を得ることができる。
- 4) 音声特徴を視覚的に示しており、アクセントとピッチ・カーブを見ながら練習することができる。
- 5) 初級から中級の国内外の学習者を対象に作成されており、独学でも授業でも使用できる。

本書は、前述の『発音練習のためのシャドーイング』を早稲田大学日本語教育研究センターの発音クラスの授業で実際に使用し、実践を踏まえたうえで、新プロジェクトを立ち上げ、新たに本文を書き起こして作成したものである。本書の全体構成を表5に示す。各課の構成は、「本文」「発音のポイント」「練習問題」となっており、その課で学習したことが理解できているかどうかをチェックする「チェック」、または役に立つ情報を補足している「ノート」が含まれている。また、本文訳（英語・中国語・韓国語）の別冊が付いている。1回の目安は10～15分程度で、1課を1回で練習できるようになっている。さらには授業の進め方の参考動画として、各課の「発音のポイント」ミニ講座がインターネット（<http://www.3anet.co.jp/ja/2861/>）で公開されている（図3）。

表5 『シャドーイングで日本語発音レッスン』の全体構成

課	タイトル	取り扱う音声項目	独話/会話	フォーマル/ インフォーマル
1	はじめまして	挨拶の発音	会話	フォーマル
2	会議	拍	会話	フォーマル
3	お土産	リズム①	会話	フォーマル
4	レストラン予約	リズム②	会話	フォーマル
5	なぞなぞ①	名詞のアクセント	独話	インフォーマル
6	イチロー	人名のアクセント	独話	フォーマル
7	友達同士	文末イントネーション①	会話	インフォーマル
8	欠席	文末イントネーション②	会話	フォーマル
9	手巻きずし	連濁	独話	フォーマル
10	なぞなぞ②	助数詞	独話	フォーマル
11	日本語ぺらぺら	オノマトペ	会話	インフォーマル
12	棚からぼたもち	短縮語	会話	インフォーマル
13	片仮名ことば	外来語	会話	インフォーマル
14	お互いさま	縮約形	会話	インフォーマル
15	住めば都	強調	独話	フォーマル
16	今日の天気	母音の無声化	独話	フォーマル
17	秋葉原の文化	複合語のアクセント	独話	フォーマル
18	奈良の大仏	動詞のアクセント	独話	フォーマル
19	三日坊主	表現意図とイントネーション	会話	フォーマル
20	若さの秘訣	への字型イントネーション	独話	フォーマル



図3 参考動画「第4課 レストラン予約」(<http://www.3anet.co.jp/ja/2861/>)

3. 本コースの評価

「なめらか！発音3-4」の評価はシラバスに掲載のとおりに行われており、学生にも伝えられている。評価項目は次のとおりである。

- 1) オンデマンド講座受講 (2% × 15回 = 30%)
- 2) シャドーイング練習 (1% × 45回 = 45%)
- 3) 期末レポート 15%
- 4) 参加度 10%

1) のオンデマンド講座受講 (2% × 15回 = 30%) は、15回のオンデマンド授業を受講し、発音練習ボタンを活用して発音練習を行うことである。

2) のシャドーイング練習 (1% × 45回 = 45%) は、CourseN@vi のシャドーイングフォルダにある45のシャドーイング練習用素材を使って発音練習を行うことである。

3) の期末レポート (15%) は、本コースをとおして得られた学びについて振り返り (課題Ⅰ)、授業で学習した音声項目の中で関心のあるテーマを3つ選択して解答するものである (課題Ⅱ)。CourseN@vi のレポート提出機能を使って提出する。

4) の参加度 (10%) は、対面式授業の出席、「BBS」への参加、「発音チェック」の提出などが加味されている。

学期末の評価においては、CourseN@vi の「成績管理」という機能により、オンデマンド講義を何回受講したか、発音練習ボタンを使用したか、シャドーイング練習素材を使用したか、BBSに参加したかなど、一覧できるようになっている。これに基づいて、学期末の評価が行われている。

日本語教育研究センターには、対面式授業で15回の授業を行う発音クラスも複数設置されているため、対面式授業を好む学習者はそちらを選択することも可能である。また、学習者が CourseN@vi の利用に慣れていなかったり、学習を管理するのが難しいと感じたりする場合にも、対面式授業での発音クラスへの登録を勧めている。

4. 調査「本コースにおける学習者の学び」

4.1 調査概要

本調査は、2013年春学期 (4月～7月) に履修登録した学習者の期末レポートを分析することによって、本コースをとおして、どのような学びが得られたのかを明らかにすることを目的としている。期末レポートは、先述のとおり、二つの課題について記述するものである。

課題Ⅰ：発音のコースをとおして得た学びについて書いてください

課題Ⅱ：3つの項目を選んで、学んだことを書いてください。

なお、履修登録した学習者40名⁹のうち、本コースの期末レポートを提出した学習者は、31名である。

4.2 調査結果

4.2.1 課題Ⅰの分析

課題Ⅰの分析から、本コースをとおして、学習者がどのような学びを得たのかを明らかにしていく。課題Ⅰの記述から学習者の学びと関連している部分を表6、7、8にまとめ、さらに学びに関する具体的な記述を太字で示した。

表6から、学習者はこの授業をとおして、発音の練習方法を学び、母語と日本語との発音を比較し、自分の発音上の問題点を把握していることがわかる。また、授業によって音声項目の知識を得ながら発音の重要性を認識し、発音が上達することによって自信へと繋がっているということが示唆された。さらには、本授業の到達目標である「なめらかな発音で話せるようになるために発音のしくみや規則を学び、学習方法を身につける」という内容が学習者の記述から読み取ることができ、到達目標の達成がうかがえる。

表6 課題Ⅰの記述の抜粋①（原文ママ）

発音の練習方法	これからもずっと自分の発音をチェックしたいときに使える方法を学びました。
	この授業のせいで一人でも勉強できるようになった。
	このコースで、いろいろな練習方法が教えてもらったら、どんどん日本人ように話すことができると思います。
	そのクラスを通して、発音練習の機会を増やします。発音の方法はよく使って、だんだん勉強になりました。
	今回の発音の授業を受けた後、色々な練習する方法を学んだ。
母語と日本語との比較	私はタイ人なので、タイ人の発音は他の国と非常に違いがあると思っています。
	このはつおんのコースをとおして、日本語と中国語の発音のちがうことはよく教えてもらいました。
	私の母語のフィンランド語には、アクセントやイントネーションがないため、このことは自分にとって最も気をつけなくてはならないことである。
	母国語と日本語を比べながら、発音を勉強するようになってもっと興味を持ちながら勉強することができた。
	英語に比べて、かなを使う日本語は発音が簡単らしいです。
	外国人にとって発音しにくい音というのはそれぞれ母国語によって違います。
	国によるいろいろな面白い発音の間違いがあります。私はこのコースで習ったことはとても面白かっただと思っています。私も留学生なので、勉強になりました。
自分の発音上の問題点の発見	日本へ来る前に、いつも自分の発音は大丈夫だと思うのだが、このコースを受講したら、自分の発音の問題が気がついた。
	私に語学を学ぶ問題も見つけました、母音の無声化です。
音韻知識の獲得	私は様々な日本語の発音の知識を身につけただけでなく、いろいろな学習機会ももらいました。
	日本語発音の規則が系統的に習われました。この授業から習った発音の規則は、教科書と「発音練習」のテキストに使うことのみならず、日常生活にもよく使います。
	発音の知識をたくさん分かりました。
	日本語の発音について、いろんな知識を勉強した。

音韻知識の獲得	発音のコースを通して、日本語の発音では、「高さ」と「長さ」の2つが大切だと学びました。
	発音のコースをとおして、リズムやアクセントやイントネーションなどを大変勉強になった。
	やっと連濁のルールを知りました、さらに、オノマトベの気持ちを伝え方について勉強になった。
	この授業のおかげでどうやってイントネーションやアクセントやリズムなど勉強できるを学びました。
	発音の違いによって、言葉の意味も違う。その上、同じの言葉は場合によって、発音の違い、意味も違う。
	この授業でたくさんのニュアンスに気付いて、覚えました。
発音の重要性	正しい発音は相手が分かるようになります。自然に話せるようになります。だから、 発音は大切 なのだと思いました。
	発音のコースをとおして、いろいろのことを勉強していた。この発音のコース取ることによって、話すことについて、ほんとうに 発音は大切 のものです。
モチベーション	一番大切なのは、発音の 自信 が増えて、みんなとコミュニケーションする意欲も高めています。
	この授業を通して、日本語で 他人とコミュニケーションする自信 をつけられました。バイト先でも、日本人の店長に私の日本語の発音を日本人とほとんど同じになったと言われて、本当に嬉しかったです。これからも日本語の発音をよくなるように頑張ります。
日本語能力の向上	さらに、普段の 日本語会話 がよく分かります。
	この授業では発音のみではなく日本語の 能力が上達 できる授業であった。
	わたしのルームメートは、「 日本語発音の上達が速い 」と言いました。

表7から、学習者が複数のオンデマンドの機能を積極的に活用していたことがわかる。オンデマンドの利点として「自分のペース」で勉強することができ、オンデマンドを何回でも視聴できるという点が挙げられている。そのほかにも、「私は恥ずかしがりやなので、自分で家で練習することができてよかったと思います」という記述があり、従来の音声教育の問題点として2.2で挙げた「母語干渉による発音上の問題点は、他の母語を持つ学習者にとっては全く問題にならないこともあり、特定の母語による発音の癖を指摘され、他のクラスメートの前で修正させられることになる」という点がオンデマンド授業によって解消されたのではないかと考えられる。

また、このオンデマンドの機能である「発音チェック」と「BBS」の活用が学びを促していることが示唆された。この結果から、オンデマンドの機能を積極的に活用することで、対面式では得られなかった利点を活かし、発音の自律学習が可能であることが明らかになった。

表7 課題Iの記述の抜粋②(原文ママ)

オンデマンド授業の活用	私は 恥ずかしがりや なので、自分で家で練習することができてよかったと思います。初めて自分の発音をこんなに気を付けました、他の授業では他の学生がたくさんいるのでこうする時間があまりなかったです。
-------------	--

オンデマンド 授業の活用	この授業は他のオンデマンドのクラスと違い、最初の五回目を教室で行って学生たちにBBSやCourse Naviの使い方をきちょうめんで教えて自宅や一人で勉強する学生たちが易く授業に適応できるようにした。(中略)自分が好む時勉強できてとてもよかったと思う。
	私はいつでも、家に、学校に、研究室にも、勉強することができる。
	オンラインビデオはとても便利です。わたしは、ビデオを一回見ることでなく、二回以上見ました。一回目は、ビデオを無停止で見て、何か教えているか、何か大切だか、何か書き留めなければならないか、全体的に分かってきます。二回目は、ビデオを見ながら、大切な知識をノートに書き留めます。発音をもっとはつきり聞いて確認したかったら、三回見ることにします。
	CourseN@viで先生作ったビデオを何回でも勉強できるのかとても便利だ。
	この方法を通して、自分の時間の割合はよくなりますし、発音の勉強も効率的になります。
	自分のペースで、自由な時間で勉強できたため、役に立ったと思う。
	自分のペースで日本語の発音を勉強することができた。それはとてもよかったと思う。
	特にオンデマンドとシャドーイングの発音の例はとても役に立つです。
BBS & 発音 チェック	このコースの発音チェックは自分に対して、一番役立ちました。
	毎回録音を提出後、先生からのコメントで発音を改善され、進歩することまでできました。
	よく私の発音をチェックして、私のきずかない間違う発音を指摘して、私の日本語の発音にとってもいいです。
	課題として、発音練習を先生たちにチェックしてもらったり、BBSでみんなの勉強経験をシェアしたりしていることがとても役に立つと思います。
	教科書や講義やBBSなどの資料とツルを利用して、本当に役立ちます。
Course Naviの発音BBSから他の学生たちと勉強の進み方や方法を話し合い、授業の内容を勉強して私の発音にとってとてもいい影響を及ぼしたと思う。	

表8から、シャドーイングが学習者の発音の上達に寄与していることがわかる。先述のとおり、この授業では発音を意識しながら話す習慣をつけるために、シャドーイング練習を導入している。学習者の記述内容から、学習者はシャドーイング練習を好意的に捉え、練習をととしてその効果を実感していることが示唆された。

表8 課題Iの記述の抜粋③(原文ママ)

シャ ド ー イ ン グ	シャドーイングのように何度も繰り返すのがいちばん速く上達できる。聞いた音をそのまま繰り返すシャドーイングの練習で弱点だったイントネーションやアクセントが弱点ではなくなった。
	私がこの授業で最大の収穫は「シャドーイング」という発音の練習方法を学んだことだと思います。今はCDの音声だけで、文章を見なくてもちゃんと繰り返せるようになりました。
	このコースに、一番好きなことは、発音を練習する方法のシャドーイングである。
	今、自分の勉強もよくシャドーイングをした。効果が良かったと思う。
	練習方法の中で、一番いい方法はシャドーイングだと思います。

シャドーイング	すぐにいいべきので、集中しなければならなし、考え時間もなし、発音は早く進歩することができる。
	この発音のコースを通して、改めてシャドーイング練習の有用性が分かってきた。
	毎週シャドーイング日本語発音のレッスンをした後、私の日本語の発音がどんどん上手になっていると思う。
	一番たいせつなことが日本語のシャドーイングだと思います。
	私はアニメと映画が好きだから、いつもアニメを見るながらシャドーイングで楽しく練習できた。その方法はとても有効だと思っている。
	「発音練習」のテキストは45課があります。教科書から発音の規則を習ってから、「発音練習」を練習するときに使えます。(中略) 発音練習を繰り返すときに、発音の規則がはっきり覚えられます。

4.2.2 課題Ⅱの分析

課題Ⅱの分析から、本コースをとおして、学習者がどのような音声項目の知識を獲得したのかを明らかにしていく。

学習者が選択した音声項目を図4に示す。課題Ⅱは、主教材『シャドーイングで日本語発音レッスン』で扱っている音声項目の中から、学習者が関心のあるものを3つ選んで記述するものである。図4から、全ての音声項目が1件以上選択されており、特定の音声項目に集中するのではなく、幅広く選択されていることがわかる。その中で、「外来語」と「名詞のアクセント」が最も選択が多かった音声項目であったため、この二つの音声項目を取り上げ、記述を表9に示す。

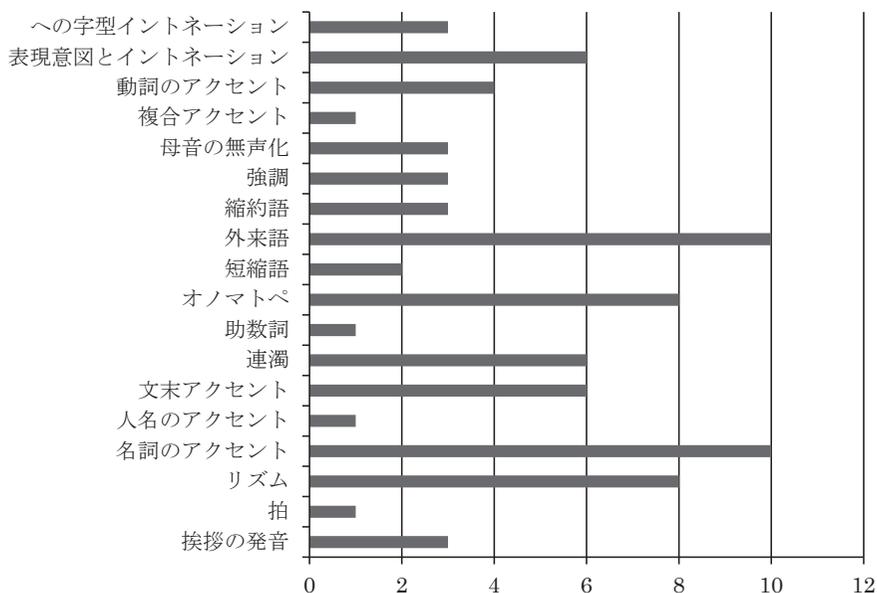


図4 学習者が課題Ⅱで選択した音声項目

表9から、学習者はこの授業をとおして、様々な学びを得ていることがわかる。学習者は与えられた知識をそのまま書き写すのではなく、音声項目について理解したことを自分のことばで説明し、母語との比較を行い、さらには学ぶことの大切さを認識していることが読み取れる。なお、表9では音声項目の理解を示している箇所を太字で、本授業で触れていない例が挙げられている箇所に下線部を引いている。これらの例からわかるとおり、学習者はただ一方的に音声知識を与えられているのではなく、オンデマンド講義や「BBS」での意見交換¹⁰をとおして日本語発音について自分で考え、得た知識を発展させていることがわかる。

表9 課題Ⅱの記述（原文ママ）

名詞のアクセント
アクセントは日本語の意味の違いにも関係します。(中略) この授業を通し、名詞の中で声の高さが下がるところがアクセント核と言って、東京方言はその核の位置によって、アクセントが頭高型、中高型、尾高型、平板型の4種類のパターンが存在することが分かりました。教材の第五課を読むと、こういう知識がよく理解できました。(以下省略)
クラスで学んだのは名詞は音とひらがなが同じでもアクセントによって違う意味になることと人名を呼ぶときにはアクセントに注意して発音することだ。(中略) 韓国語の場合も同じだ。一番よく出てくるアクセントは長音で辞書をみれば「:」この記号が単語の中にあるとその単語を長く発音するべきである。韓国語は日本語と違ってその発音の高低によって意味が違ってくることはあまりない。(中略) これからは新しい単語を習ったり日本人の名前を聞いた時、アクセントと一緒に覚えて学ぶことが必要だと思う。
日本語発音を学んで、一番難しいことはアクセントだと思っている。私の母語(ベトナム)はアクセントがないけれど、6種の声調がある。英語を学ぶとき、英語のアクセントがあるが、アクセントの法則がある。例えば、2音節の名詞と形容詞で、第一音節を強調して、2音節の動詞の場合で、第二音節を強調するルールがある。日本語では、そのようなルールがない、各言葉で声の高さの位置が違う。(以下省略)
日本語の名詞のアクセントについて、私は3つの発音ルールを学びました。まず、二拍以上の名詞では、一拍目と二拍目のアクセントが異なります。例えば、「なごや」の発音では、最初の「な」が高く、次に「ご」のアクセントが必ず下がります。次に、名詞のアクセントでは、平板型、頭高型、中高型、及び尾高型という4つのタイプがあります。平板型と尾高型は名詞の後ろに付く「が」の発音の高さによって区別することができます。そして、複合名詞のアクセントは中高型が多いです。
名詞は、アクセントが四つあります。つまり、平板型と、頭高型と、中高型と、尾高型です。名詞は、音は同じでもアクセントによって意味が変わります。教科書の例は、「酒・鮭」と、「故障・胡椒」と、「端・箸・橋」と、「雨・鮎」です。ほかの例は、「以上・異常」や、「蛙・帰る・変える」や、「石・意志」などです。
発音について、私にとって一番難し所は名詞のアクセントだ。外国人は最初は自分の国で日本語を学んで、発音やアクセントはほとんど先生からもらった。言葉を学ぶのは模倣することは重要だ。日本は46都道府県があって、地方によって名詞のアクセントは違う。外国人は他の言葉を学ぶとき、自分の母語は方言みたいの影響が存在し、きちんと名詞のアクセントを発音したいなら、模倣することと練習することは本当に大切だと思う。
アクセントはとても大切です。(中略) 日本語の発音では、「高さ」と「長さ」のふたつが大切です。「高さ」と「長さ」によって、発音が変わります。(以下省略)
日本に来てから、間違っているアクセントが本当に誤解を生むことがあると気づいた。そのため、例えば魚の話をするとき、誤って「酒」を言ってしまうと、日本人から笑われることがある。(以下省略)

日本語の名詞のアクセントもとても大事だと思います。どんなアクセントを使うによって、言葉の意味が変わります。たとえば、帰る、変える、買える、蛙など全部は「かえる」ですが、アクセントが違います。そういう言葉は日本語でたくさんあります。(中略) ですから、日本語でちゃんと自分の意見を伝えたいなら、正しいアクセントで発音をしななければならないと思います。

日本人のように名詞のアクセントができなかったので、相手は私の言いたいことが時々わからなかった。このレッスンでよく名詞のアクセントを勉強して、色々な名詞のアクセントがわかってきたから、今もっとなめらかに端と橋の発音を言うことができる。

外来語

カタカナを発音するときに、私にとっていちばん難しいことは英語とちがう発音をすることです。私はいつも英語にちかい発音をしてしまいます。とくに「フ」はとても発音しにくいだと思います。例文のなかの「ファミリー」と「フィーリング」は何回も発音してみたら、日本語っぽくないところをわかりました。「ファ」と「フィ」を発音するときに、英語みたいに「FA」を発音するのではなく、「フ」のなかの「ウ」を忘れてはいけません。英語にかきますと、「FUI-LINGU」を発音したほうが日本語っぽく感じられるかもしれません。

日本語の外来語は様々な面白いことがあります。まず、外来語必ずカタカナで書きます。そして、外来語は短くすることは良く見えます。例えば、「マクドナルド」は言う時に「マクド」になります。それだけじゃなくて、日本の違う所にも、「マクドナルド」の言い方も変わっています。「マクドナルド」はたまに「マック」だけを使う所もありそうです。あとは「パーソナルコンピューター」は「パソコン」になります。言う言葉だけではなく、書き言葉も短く書きます。なぜか、外来語から来た言葉は日本語に変えるととても長い言葉になります。それで、良く短くすることが多いだと思います。

この外来語はとってもおもしろいテーマだと思います。日本だけではなく、ほかの国の母語でも外来語もあります。たとえば、英語では一番面白い外来語は「Mammoth」だと思います。「Mammoth」は元々ロシア語からの外来語です。「Mammoth」は普通何年前に廃止された動物の意味です。だけど、今英語で「Mammoth」はなんでもすごく大きいものに対して使う言葉です。(中略) それ以外に、元々日本語から来た英語の外来語もあります。一つ英語が日本語から借りた外来語は「Sudoku」です。(中略) さらに、日本語から元々の英語の外来語の言葉はほとんど意味が変わってないです。

外来語といえば、日本語を習い始めた頃では、外来語はすべて英語から翻訳された言葉だと思っていましたが、時間が経つに伴って、その考えは変わりました。日本語の外来語は、われわれ英語を学んでいた外国人にとって楽ではないかと思っていましたが、**外来語は英語の言葉だけではなく、ほかの国の言葉も含まれています。**たとえば、パンはポルトガル語、クレヨンフランス語、テーマはドイツ語など。外来語の中で短縮して表現する言葉があります。あるいは二つの外来語の言葉を一つに短縮することも少なくありません。たとえその二つの外来語の本来の意味がわかっている、二つの言葉を短縮するとなかなかその意味がわかりません。たとえば「スマホ」というのは「スマート」と「ホーン」を短縮した言葉です。(以下省略)

外来語では、外国から日本へ来た単語ということだ。日本語の中で、外来語は多くて、英語やスペイン語、ポルトガル語、オランダ語などから外来語になった。日本語は物の名前は外来語で付く名前は多い。例えば、牛乳とミルクは同じ物だが、ミルクは外来語だ。ミルクの発音と元英語の発音は似ているが、少し違うところがある。それに、音節と強い発音の所も少し違う。日常生活でたくさんの外来語があるので、発音練習の時たまに単語のもともとの発音に影響することがあって、練習は大切だと思う。

カタカナ言葉のアクセントは、慣れるまでは難しいようです。発音チェックで、「クラス」・「ボランティア」・「ファミリー」などのアクセントは、どこで音が低くなっているか、どちらが高い音かというように、注意されました。(以下省略)

実は、カタカナ語と元のことは発音が違う。カタカナ語の音がたくさんある。(中略) 発音以外、カタカナ語のアクセントは注意しなければならない。カタカナ語は後ろから三拍目にアクセント核を置くことが多い。でも、三拍目は「ン」なら、その一つ前の拍にアクセント核を置くことが多い。そして、「ボランティア」のアクセント核は「ラ」を置く。現代新しいことはカタカナ語が多い。日本語を上手に話せるように、カタカナ語の発音はとても大切だと思う。

例えば「フェスティバル」ということばをローマ字で書くと、「fesutibaru」になる。ローマ字で書いたことばを見ると、外来語のことばは原語に比べてかなり長くなりがちだと分かる。ゆっくり発音すると、問題がないが、早く話すとき「インターナショナル」、「ウィークポイント」や「ボランティア」といったことばを使うと、気をつけなくてはならない。

私はオーストラリア人だから、英語で話したり考えたりする。カタカナ語は主に英語から入ってきた言葉だけど、元のことばとカタカナ語の発音は全然違う。(中略)でも、第13課「カタカナことば」のレッスンをした後、英語の言葉じゃなくて、もっと日本人のようにカタカナ語を発音することができた。

私はこの会話をよんだ時、英語は私の母国語であるために、たくさんの知っているカタカナがあったことに気づいた。例えば英五で“volunteer”けど、日本語で『ボランティア』という。その結果、二つの単語の発音は完全に違います。また会話から、『ファミリ』と『フェスティバル』を使う。しかし、『家族』や『祭り』の日本語のたんごは既に存在するので、なぜカタカナの単語を使いますか。その言葉は国際的な言葉なら、だいたいカタカナの言葉を使います。英五は私の母国語であるが、正しく単語を発音することを確認する必要があります。

4.3 考察

本調査の結果から、学習者はオンデマンド併用授業をとおして、発音に関する様々な学びを得ていることが示された。学習者はオンデマンド併用授業によって得られた音声知識から、母語との比較を行い、自分の発音上の問題点を把握し、発音の上達のための練習方法を学んでいた。また、学習者は一方向的に知識を与えられているのではなく、それらの知識を発展させ、理解を深めていた。さらには、CourseN@viの活用が学びを促し、学習者はそれらが自身のなめらかな発音の習得のためにプラスに作用していると認識していることが示唆された。オンデマンド授業は一方向的な講義という印象を持たれることもあり、発音学習には不向きであるという印象を持たれることがあるが、オンデマンド授業に独自の工夫をし、様々な機能を活用することによって、発音学習が促されたと考えられる。

5. まとめ

本稿では、オンデマンドを利用した新しい音声教育実践の取り組みを紹介し、新しい音声教育の考え方について述べた。また、期末レポートの分析から、オンデマンドを利用した発音学習は可能であり、さらには学習者の自律学習を促すことが示唆された。

オンデマンドを視聴しながら発音練習ができる発音練習ボタン、シャドーイング練習ができる45種類の素材、メンターがサポートする「BBS」および「発音チェック」という様々な機能を搭載することによって、一方向的な講義形式ではないオンデマンド授業を展開することができた。

また、オンデマンド講義によって与えられた知識について学習者が自ら考えることにより学びを得て、主体的に発音学習に取り組むことにより、その長所を最大限に生かした発音学習を進めていくことができたと考えられる。

さらに、オンデマンド講義の受講を学習者に最初から丸投げして放置するのではなく、5回の対面式授業において発音学習の方法を学ぶことによって、学習者の自律学習に繋がったと考えられる。すなわち、対面式授業とオンデマンド授業との相乗効果が学習者の学びを促したと言えよう。

今後益々多様化することが予測される学習者の学びの環境のひとつとして、発音学習におけるオンデマンド授業の充実が期待される。

注

- 1 とだ・たかこ（早稲田大学大学院日本語教育研究科・教授）
- 2 おおくぼ・まさこ（早稲田大学日本語教育研究センター・非常勤インストラクター）
- 3 対面式の授業は、週に1回、90分の授業である。
- 4 詳細は本誌所収の稲葉論文を参照されたい。
- 5 学部・大学院等の垣根をこえて履修できる、オープン化された科目の一つである。
- 6 日本語教育学における理論研究の選択科目の一つである。
- 7 学習者が自分の発音を録音したファイルの提出する機能である。
- 8 博士後期課程在籍の音声を研究する6名がメンターとして本コースを履修している学習者の支援を行った。
- 9 本コースは、留学生別科の学生、早稲田大学の学部生および大学院生、研究員などの様々な国籍の学習者が履修している。
- 10 BBSでの意見交換による学びについては、千ほか（本誌所収）を参照されたい。

参考文献

- 戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク
- 戸田貴子（2008a）「日本語学習者の音声に関する問題点」『日本語教育と音声』第2章、くろしお出版、pp. 23-41
- 戸田貴子（2008b）「大人になってからでも発音の習得は可能か」『日本語教育と音声』第3章、くろしお出版、pp. 43-59
- 戸田貴子（2008c）「『発音の達人』とはどのような学習者か」『日本語教育と音声』第4章、くろしお出版、pp. 61-80
- 戸田貴子（2008d）「音声の習得」坂本正・小柳かおる・長友和彦・畑佐由紀子・村上京子・森山新編『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』第3章第2節、スリーエーネットワーク、pp. 149-167
- 戸田貴子（2009）「日本語教育における学習者音声の研究と音声教育実践」『日本語教育』142、pp. 47-57
- 戸田貴子（2011）「音声教育と日本語能力」『早稲田日本語教育学』9、pp. 59-65
- 戸田貴子・大久保雅子・神山由紀子・小西玲子・福井貴代美（2012）『シャドーイングで日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク

※本研究は早稲田大学特定課題研究（課題番号：2013A-6459）の助成を受けている。